

# 「沖縄と英語教育」

*English Education in Okinawa*

「英語立県沖縄構想」推進事業がスタートし、グローバル化に対応した英語教育改革が始まりました。  
沖縄の高等学校・中学校における英語力向上や英語教育の課題ついて、一緒に考えてみませんか。

**新垣 誠** 建学の中心人物であった仲里朝章牧師の原点は、皇民化教育への反省と「国際的平和の島」としての沖縄の再建でした。その挑戦は、常に教育現場にありました。仲里先生の思いを受け継ぎ、平和を実現する教育者を育成することは、私たち大学院の大きな使命です。本学の英語教育の歴史は、学院の歩みと共にあったと言っても過言ではありませんね。



金永秀

本学院は、短大時代から〈英語のキリ短〉と英語教育で名を馳せましたが、活きた英語教育を戦後最も早く実践できた最大の理由は、多くのアメリカ人宣教師がやって来たことと関係します。スラッシャー先生(第7代学長)も、若い時に英語を教える教育宣教師の一人でした。何より、創立時に学院の基礎を築いた三人の内クライダー、前田伊都子の両先生は米国教会から派遣されたのでした。

**新垣 誠** 現在の日本における英語教育の課題をどう考えていますか？



Christopher Valvona

It is often said—surely with some truth—that the traditional Japanese educational model does not sufficiently prepare students for the realities of modern, authentic communication in a foreign language. What is needed among current and future educators is to turn a critical eye on the methodologies that currently predominate in the Japanese education system. This is not in order to say that all current teaching methodology is bad or wrong, which would be a huge oversimplification; just that the approach in Japan (and, more specifically, Okinawa) must be scrutinized and alternatives carefully considered so as to find the most effective method for this specific context.

Critical discussion is therefore needed about learner motivation, cultural implications of various methods, causes of and solutions to student reticence, grammar vs. communication, implementation of MEXT guidelines (such as Teaching English in English), and many other issues. What is more, educators need to have up-to-date knowledge of global trends in language teaching methodology; for example, task-based

language teaching (TBLT), content and language integrated learning (CLIL), use of authentic materials, and so on.

**新垣 誠** 少数言語としての琉球諸語を持つ沖縄で、英語教育を考えるとはどういうことでしょうか？



新垣 友子

2009年にユネスコが琉球諸語を危機言語として認定して以来、琉球弧は、6言語(奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語)が共存する多言語社会であるという現状が認識され始めてきました。「『日本語』話者が『英語』を学ぶ」という単純構造に取まらないこの多言語社会において、どのように英語教育に携われればよいのでしょうか。言語の多様性の中で、互いの人権・言語権を尊重できる英語教育の在り方を議論すべき時がきています。

**新垣 誠** 沖縄というユニークな場所で英語教育の研究をする面白さはあるですか？



A. David Ulvog

In selecting a graduate course of study, an applicant should not only consider the curriculum and faculty, but also the environment and resources available for the applicant to pursue his or her research. As a location for graduate study, Okinawa offers a special environment and resources on account of its unique place both culturally and historically in Asia. For decades, Okinawans have set out around the world. They and their descendants have maintained strong ties with their homeland. In recent years, more and more people throughout Asia and other parts of the world are coming to see and experience Okinawa. Very often, the medium of such exchanges is English. Today, many people in Okinawa must use English to accomplish their daily pursuits. In this unique environment, English is no longer a tool for hegemony to use in wielding their influence on other countries, but an indispensable instrument harmonizing and facilitating communication among many peoples. The Graduate School of Intercultural Communication is able to leverage these benefits and guide students in their research to successful completion of their degrees.

**新垣 誠** 沖縄における英語教育では、ジェンダーの視点も重要だと思いますが、いかがですか？



仲里 和花

英語圏の男女のコミュニケーション・スタイルの違いについて、一般に、男性は地位や独立を求める競争的会話、女性は和合や親和を求める協調的会話をする傾向があると言われています。このようなコミュニケーション・スタイルの相違は、男性が常にリーダーシップをとり、女性がサポート役にまわるという男女の力関係を反映しています。

ジェンダーの視点から沖縄の英語教育について考える際、アメリカ文化や英語に憧れ、米兵と交際する女子学生の事例が浮かびます。「英語を教えてもらう」という上下関係の下、米兵と彼女の間には、言語的・文化的・民族的優劣性に加え、ジェンダーの優劣性が加わって、強者と弱者の差別的力関係が構築されていきます。言語は人間の力関係を変えていく力を持っています。沖縄における英語教育の中で、このような言語の背景にある文化的・民族的・性的力関係を認識する批判的思考を身につけ、言語を通して平等関係を構築していく方策を考えていくことが肝要です。

**新垣 誠** 英米中心ではなく英語の持つ多様性が強調されて久しいですが、沖縄で英語の多様性をどう考えますか？



Daniel Broudy

One of the central issues we face in English education in Okinawa is striking a balance among three often conflated or conflicting concepts and practices—developing expert English speakers, developing experts in English language teaching, and developing in future teachers a critical awareness of how English can best be understood in terms of Englishes. Teaching ought to reflect the reality that English is a global language of exchange, and its mastery must be separated from a necessarily Western orientation. Okinawa, in fact, represents an ideal region where the concept of Englishes can be well understood and elaborated. Local people have long understood how their variety of Japanese is politically inflected, and how these linguistic features are used to emphasize differences in power and prestige in larger society. Likewise, too often, the connotations associated with the English language itself are grounded in dominant cultures, such as American or British, and for many people around the world such dominance also connotes a history of colonialism. The idea of Englishes empowers learners and teachers. Competing varieties of the language possess an intrinsic value that crosses boundaries, and this is so important to local identity.

**新垣 誠** これからの沖縄社会で、英語教育はどう展開していくのでしょうか？



大城 直人

2015年度の文部科学省の調査によると、本県の中学校・高等学校で英語を教えておられる先生方の英語力は極めて高く、英検準1級以上の英語力を有する先生方の割合は、中学校・高等学校ともに全国10位以内にランクインしています。一方、中学生・高校生の英語力はと言うと、何れも40位を下回り、高校生に至っては最下位となっています。

本県における、英語教師の高い英語力と生徒の低い英語力のギャップを埋める鍵は、英語教育の根幹を支える英語授業力の向上にあると私は考えます。自らの英語力を高める努力は言うまでもなく不可欠ですが、同じエネルギーを英語授業力の改善・向上に注ぐこともまた極めて重要なことです。また、他府県に目を転じてみると、都道府県の枠を超えて有志で勉強会を立ち上げ、授業研究に熱心に取り組む姿が散見されます。学び続ける教師像の確立が中教審答申においても提起されていますが、受け身ではなく、教師自らがアクティブ・ラーナーとして主体的に英語授業力向上に向けて取り組むことが肝要です。

本大学院における教員養成の立場から英語教育に関わる者として、現場の先生方だけでなく、教職課程で学ぶ学生も気軽に参加できるような学びのプラットフォームの構築を実現できたらと考えています。学習意欲や学習習慣の欠如、日本語による論理的思考力や表現力の不足など、生徒の改善すべき課題も少なくはありませんが、まずは英語教育に関わる私たちがより良い英語教育を目指して一歩踏み出すことができれば、生徒たちの笑顔に出会えると確信しています。



新垣 誠

『リング・フランカ』としての英語を活用して多様性を尊重し、この島の平和を実現する必要性がますます高まっています。その実現のためには、新たな教育課題に対応し新しい学校づくりをリードできる教員の養成が必要です。本大学院ではより実践的な科目を開設し、「英語で行う授業実践」に向けて、経験豊かな英語ネイティブ教員が指導します。加えて、タスクベース・ラーニング教授法を専門とするネイティブ教員による科目においては、英語でのディスカッション等参加型授業や、アクティブ・ラーニングを活用して高度な英語コミュニケーション能力の育成に努めています。言語学習用アプリや人工知能が日々飛躍的進化を遂げる今日、沖縄の英語教育の場面で真摯に生徒と向き合うための実践的指導力の向上と新たな教授法が求められています。大学院においても、単なる理論や研究活動を中心とした研究者の養成のみならず、教育者としての実践力を身につける必要があります。

本大学院では、大学院段階における教員養成に求められる「理論と実践の往還」を支える修学支援として現職教員が勤務を続けながら修学できるよう長期履修制度を設けています。また学部で教職課程を終えたばかりの学生が更に学びを深め、教育現場に出る前に実践的スキルと自信を身につける学びも応援しています。英語運用能力・実践的指導力をレベルアップし、新しい時代の教育者に生まれ変わいませんか。

